

むかし、あるところに、親孝行の息子がいました。おかみさんと、年とった父親と、三人で暮らしていました。

ところが、やがて、父親がなくなっていました。息子は、悲しくて、仕事も手につかず、毎日くよくよと泣いてばかりいました。すると、となりのうちの人に来て、

「村のみんなで伊勢参りに行くんだが、おまえも、家でくよくよしているよりは、いっしょに伊勢参りに行って、気を晴らしたらどうだ」といってくれました。そこで、息子は、父親の功德にもなるだろうからと、村の人たちといっしょに伊勢参りに行きました。

お参りをすませて、江戸までやって来ました。その晩、息子は、父親があんまり恋しくて、ひとりで町に出てそこらを歩いていました。すると、ある店に、鏡がかざってあって、その鏡に息子の顔がうつりました。息子は、自分の顔を見て、父親がいたと思って、よろこんでその店に入りました。そして、

「このおやじ、いくらだ」とききました。番頭さんは、何のことか分からなくて、

「どれのことかい」とききかえました。

「このおやじだ」

「いや、これはおやじじゃない。鏡ですよ」

「いいや、おやじだ。ぜひとも売ってくれ」

息子は、鏡を買々と風呂敷に包んで持って帰りました。そして、家に着くと、奥の座敷の長持ちにこっそり入れておきました。

息子は、朝晩、長持ちを開けて鏡を見ては、

「おやじ、元氣か」といつて、にこにこ笑いました。それからは元氣になって、また、一生懸命はたらくようになりました。

あるとき、おかみさんが、気がついて、

「うちの人、朝晩、奥の座敷に行つてはにこにこ笑っているけれども、いったいどうしたんだろう」とふしぎに思いました。そこで、あるとき、後ろからそつと行つてのぞいてみたら、夫が長持ちを開けて、『おやじ、元氣か』といつてにこにこ笑っています。おかみさんは、夫が山へ行つて留守のとき、長持ちを開けてみました。すると、若いきれいな女の人がこち

らを見ていました。おかみさんは、たいそう腹を立てました。

夫が山から帰ってくると、おかみさんは、いいました。

「おまえさん、いい女を連れてきて、奥の長持ちにかくしているね。いったい何を考えてるんです」

夫は、

「いいや、女なんてかくしていない。行つてよく見ろ。あれは、おやじだ」といいました。おかみさんも、たしかに、毎日長持ちに入っている女もないだろうと、もういちど見に行きました。すると、こんどは、般若の面のようなおっかない顔のお化けがいました。おかみさんはびつくりして、

「化け物がいた！」とさけんで逃げてきました。夫は、

「なんだって。おやじのはずだが」といつて、こんどはふたりで見に行きました。すると、長持ちの中に、おやじと若いきれいな女の人が並んでいました。それを見て、夫は、

「おやじも若い妻を持ったようだな」とよろこんで、それから、いつそう安心して、せつせとはたらきましたとさ。

どんとはらい

村上郁再話

資料『昔話研究1―52』